
フィールドワーク便り

フィールドワーク便り

フィールドワーク便り

都会の一角に小さなオアシス「薬草園」

杉 野 好 美 *

インドネシアでの調査を行なうためには、調査許可に関する手続きが必要であり、首都ジャカルタにある数カ所の政府機関を訪

問する。その政府機関のひとつに、国内の治安・地方自治などを管轄している内務省（*Kementerian Dalam Negeri*）がある。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

内務省の受付には、朝から手続きのために各地から来たであろうインドネシア人たちが書類を片手に待っている。私が要件を伝えると「建物Fに行ってください」と指示された。省の敷地内にはたくさんのビルが立ち並んでいて、そこだけでひとつの小さな街区のようになっている。建物Fを探しながら進んでいくと、ビルとビルの間の決して広くはない中庭の一角に、たくさんの種類の薬草が植えられているのを発見した(写真1)。高く聳え立つビルの合間に、南国の日差しを浴びて、たくましく育っている薬草を見つけた時は少し嬉しくなった。それは、これから私が調査しようとしているテーマが、インドネシアにおける人々の薬草利用についてだからだ。

インドネシアの薬草は、一般的にタナマン・オバット (*tanaman obat*) という。タナマン・オバットは、熱帯気候に属するインドネシア各地に生息するさまざまな効能をもつ薬用植物/薬草である。インドネシアには、約3万種の植物が生息し、7,000種類の薬草があるといわれているとおり、生物多様性が豊かで薬用植物の種類も豊富である [Kementerian Kesehatan RI 2011: 1]。タナマン・オバットという言葉は広く使用され、人々が手に入れることができる薬草全般を指すが、自分自身または家族の健康維持・症状緩和のために煎じて飲むことが一般的である。また、ジャワ人を中心に、ジャムウ (*jamu*) ドリンクと呼ばれる薬草ドリンクにして飲用されることもある。

内務省で所要をすませた後、省内の小さな薬草園に戻り、通りがかりの職員に許可を得



写真1 内務省内の都会のオアシス「薬草園」(筆者撮影)

て、その薬草園内を観察した。よく見るとそこには、『*Tanaman Apotik Hidup (TOGA)*』という看板があった。タナマン・アポティック・ヒドアップ (*Tanaman Apotik Hidup*) は、「暮らしの中の緑の薬局」と意識することができる。トガ (TOGA) はタナマン・オバット・ケルアルガー (*Tanaman Obat Keluarga*) の略で、庭先など身近にある「家庭の薬草」という意味である。この看板には66種類の薬草名が記載されていた。さらにそれぞれの薬草には、インドネシア語の薬草名とその効能が記載されたラベルプレートが設置されていて、とてもわかりやすい。伝統的な市場やスーパーマーケットでよく売られ、料理にも使用されるレモングラスとパندان (タコノキの一種) の葉や、ジャムウドリンクにも使用されるショウガ・ウコン類や、キンマ (コショウの仲間) の葉などが育っていた (写真2)。

しばらく薬草園内で観察していた私は、庭の世話をしている人に会ってみたいとなった。内務省の職員に、「省内にある薬草園は、だ

れが育てていますか」と質問したところ、「職員の奥さんたちが作って、育てています。もし薬草がほしかったら、薬草園に誰もいなくても『少し分けてください』と呟きながら、少しとっても大丈夫ですよ」と言われた。実は、今インドネシアでは、このように空間の一角に薬草園を作る活動が薦められている。3 年前に、中部ジャワ州スマラン市に留学していた時も、道沿いの一角を近所の主婦たちが薬草園にしていた。保健省や農業省が支援して、地区の婦人会（PKK：ペーカーカー、Pembinaan Kesejahteraan Keluarga）・学校などさまざまなグループが薬草園を作り育てている。コンペが開かれ優秀な薬草園は表彰される。婦人会は、内務省の管轄でもあるため、内務省も見本となるべく、率先して敷地内に薬草園を設置しているのかもしれない。

話は戻り、内務省内の薬草園にある薬草をひとつ紹介したい。クミスクチン（*kumis kucing*, *Orthosiphon stamineus* Miq.）というもので、これはインドネシア語で「ネコのヒゲ」という意味である。この紫または白い

花は、まさにネコのヒゲそっくり、ネコ好きは愛着をもつかもしれない。日本の沖縄県でも育ち、最近は京都などの園芸店で見ることができ、冬場の温度管理に気をつければ育てることができる。インドネシア政府の薬草研究機関によると、利尿作用・尿路結石・リウマチの抗炎作用・脂質異常症・高血圧などに効果があるそうで、特に他の薬草と一緒に飲むと利尿作用が増強されるとある [Kementerian Kesehatan RI 2011: 148-149] (写真 3)。

ジャカルタでインドネシア人と会話する機会があると、私は「薬草（*tanaman obat/jamu*）を飲んでいますか」と質問してみることにしている。先日回答してもらった職業運転手の 60 代男性によると、尿路結石になった時、先ほどのクミスクチンと 3 種類の薬草を煎じて、1 日 3 回 1 週間続けて飲んだところ、排尿時に結石が出て、苦しみから



写真 2 看板には、66 種類の薬草名が記載されている（筆者撮影）



写真 3 クミスクチンの花、ネコのヒゲにそっくりである（筆者撮影）

解放されたという。他にも2人の中年男性から同じような話を聞いた。見た目のかわいいネコのヒゲは、インドネシアの薬草として大活躍のようである。

年々高層ビルの建設が進み、排気ガスなど大気汚染の課題を抱え、慢性的な渋滞など、都市ジャカルタの生活には心休まるどころが少ないが、このような土地の一角に、薬草園があることで、人々が自然に触れ、インドネ

シアの薬草の知恵が守られているようである。みなさんも、これから調査許可の手続きの時などに内務省を訪れる機会があれば、ぜひこの薬草園に寄ってみてほしい。

引用文献

Kementerian Kesehatan RI. 2011. *100 Top Tanaman Obat Indonesia*. Jakarta: Badan Penelitian dan Pengembangan Tanaman Obat dan Obat Traditional.

きれいなキャッサバ

魚住耕司*

農作物を栽培している人たちにとって、多産で病虫害に強い品種は、そうではない品種より好ましいものなのだろうか。

カメルーン的首都ヤウンデから南に約108キロに位置するA村では、主食のひとつとしてキャッサバが栽培されている。

キャッサバの品種名

日本の米にコシヒカリ、ひとめぼれなどの品種があるように、キャッサバにも多くの品種がある。品種には古くから存在する在来種と、病虫害への耐性、収穫量、味の改善などを目的として意図的にかけ合わせてつくられた改良種がある。カメルーンでは焼畑耕作の

ために森林が失われているとされ、その防止策としても、小さな土地から大きな収量を生み出す改良種の普及が政府や援助機関などによって行なわれてきた。

A村で栽培されている在来種には、エコブレ (Ekobelé), ザエボマジエ (Zaébomagé), ンゴン・クリビ (Ngon Kribi), アタン・ドゥマン (Attends Demain), マニョック・パタット (Manioc Patate), マニョック・ジョーン (Manioc Jaune), ビトゥトゥ (Bitoutou) など多くのものがある。これらの品種名は、この地域に住むブルと呼ばれる民族が話すブル語、または、この国の公用語のひとつであるフランス語で記されている。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

その意味には諸説あるものもあるが、日本語に変換すると順番に、「厚い」、「飢えが私に何ができる」、「クリビむすめ」、「明日まで待て」、「サツマイモ・キャッサバ」、「黄キャッサバ」、「こぶ」となり、それぞれ品種の特徴が名称で表されている。「厚い」は、キャッサバの皮が厚い。「飢えが私に何ができる」は、飢えに苦しむことがなくなるほどキャッサバがよくできる。「クリビむすめ」は、海沿いのクリビという町を原産地とし、以前は「海むすめ」と呼ばれていた。女性に例えるところは、あきたこまち、つや姫などの日本の米と似ている。「明日まで待て」は、明日まで待てばキャッサバがたくさん収穫できる。「サツマイモ・キャッサバ」は、見た目がサツマイモに似ている。「黄キャッサバ」は、中身が黄色っぽい。「こぶ」は、茎の突起物がこぶのように大きい。在来種の名前は、こうした意味をもっている。

農業プロジェクトで村に入ってきた改良種は3つあるが、その名称は、8034、92/0326、96/1414 という無味乾燥な数字の羅列になっている。覚えにくいので混同されやすいが、唯一8034だけ「ミシシッピ」という別名で呼ばれることがある。ミシシッピというのはアメリカを流れる大きな川のことで、キャッサバを縦に切って開いた時に見られる筋の様子がミシシッピ川に似ているところから、この名称が付けられた。ミシシッピ川は支流が非常に多く、この品種も同じように筋がたくさんあり、それが村の人たちには気になるらしい。調理して食べる時も、加工する時も、ほぼいつも筋を取り除かなければならないからだろう。



写真1 キャッサバの畑

キャッサバの味

A村にいと、キャッサバの改良種は苦いという話をよく耳にする。そして、キャッサバが苦いといわれる時、それはまずいという意味合いをもつ。カメルーンの人たちはコーラの実、ンドレという野菜料理、ヤシ酒、黒ビールなど苦い味のものを好んで食べたり飲んだりするので、苦みが好きなのかと思うが、キャッサバは例外なのだ。

赤いキャッサバは調理用、白いキャッサバは加工用という話もよく聞く。これはイモの皮の色の話で、赤と白の2種類があり、A村では在来種は赤、改良種は白が多い。在来種には甘くておいしいもの、改良種には苦くてまずいものが多いと思われるようで、このためか、市場では赤いキャッサバの方が白いキャッサバよりもよく売れるという。ここでいう調理とは、キャッサバの皮をむいて洗い、ゆでて食べることを、加工とは、保存がきくように発酵・粉碎・乾燥などの作業を行なうことを意味する。加工品には、バトンというちまきに似たものなど、さまざまなものがある。

「改良種は苦い」、「赤いキャッサバは調理用、白いキャッサバは加工用」という話には疑問を感じる時もある。白い在来種・改良種の中にもおいしいもの、普通に食べられるものがあり、こうした表現は、自明のこととして語られてはいるが、確証のない固定観念なのかもしれない。

村の人たちは、本当にキャッサバの味を分かっているのだろうか。私はそれを確かめるため、彼らに対して利きキャッサバをやってみた。多くの人が栽培する3つの在来種（エコブレ、ザエボマジエ、ンゴン・クリビ）と3つの改良種（8034、92/0326、96/1414）の計6品種を選んで調理し、名称を伏せたまま食べてもらい、感想を聞いてみた。

品種の識別に長けたカメルーン人の専門家と朝早く畑へ行き、品種ごとに収穫していった。茎・若芽・葉柄の色などの特徴をとらえ、探していくのだが、難しい作業である。中には季節によって通常とは異なる色を示す品種もあるらしく、まるでキャッサバが人間をだまそうとしているかのようだ。

収穫が終わったら次は調理だ。当初は、別の場所で調理して、家を回って食べてもらい、感想を聞こうかと思ったが、村には呪術があるから毒殺を警戒し、誰も口を付けようとはしないと言われ、村の人たちの家で目の前で調理することにした。皮をむいて洗って切り、大鍋に1つの品種を平らに並べ、バナナの葉を仕切りとして上からかぶせる。これを6回繰り返し、6つの品種の層をつくり、水を加えてゆでる。ゆであがったら、別々の皿にのせて並べ、準備完了だ。

家族が居間に集まり、見た目が変わらない6種類のキャッサバを興味深そうに眺めている。各人に全種類のキャッサバを1つずつ順番に食べてもらい、味と苦さについて感想を聞き、5点満点で点数をつけてもらう。そして、1番好きな・嫌いなキャッサバとその理由を尋ねる。反応はまちまちで、口に含んで「うまい」、「うまくない」、「うまい」と淡々と答えを繰り返す人もいれば、じつくりと味わい、豊かな表現で饒舌に語る人もいる。ゆっくりとおいしそうに食べる人。口に入れてすぐ顔をゆがめる人。ぺっと吐き出して外に投げ捨てる人。食べて、これはどの品種だと当てようとする人。子どもたちも、大人が利きキャッサバをしている様子を後ろの方でじっと観察している。

ある青年がキャッサバを食べ、「本当にすばらしい（merveilleux）味がする」と大きめの声で感動を伝えようとする。子どもたちは、それを見てケラケラと笑い出す。その大げさな表現が滑稽なようだ。ちなみに、彼は後日 merveilleux というあだ名を付けられて、からかわれることとなる。大人たちがひととおり終えた頃、子どもたちが目の前に座り、だまって見つめる。自分でもやってみたいらしい。私は調査協力へのお礼としてタバコ、酒、ビスケット、飴を渡していたので、それが欲しいという気持ちもあったようだ。9歳の女の子は、1番好きなキャッサバを尋ねると、それがのった皿を指さす。理由を聞くと「きれいだから」と答え、まわりの子どもたちが笑い始める。隣にいた少し年の離れた兄がすぐ「おいしすぎるって言ってる」と



写真2 キャッサバ6品種

通訳する。「おいしすぎ?」とその子に聞くと、「うん」と言う。どうやら、さっき見た青年の言葉をまねして、おしゃれに答えたようだ。

人の味覚はさまざまだ。誰もが嫌う品種をおいしいと言う人もいた。だが、多くは在来種のンゴン・クリビとエコブレの味を1番好きだと言い、改良種の92/0326と8034の味を1番嫌いだと答えた。そこに年齢は関係なく、小さな子どもでさえ、ずっとキャッサバを食べ続けているためか、大人と同じほど味を分かっている。大半の人は苦くて筋の多いものを嫌い、薬のようにきつくはない微妙な苦みの違いさえ感じとっている。

売りにくいキャッサバ改良品種

キャッサバは、収穫するとすぐに腐ってしまう。だから、市場でキャッサバを売る女性たちは、その日のうちに売りさばこうと、客の気を引くさまざまな工夫をこらしている。ある女性は、小さなキャッサバを下に隠し、



写真3 市場のキャッサバの山

大きなものをてっぺんに置き、客に見せる山を高く大きく見せる。別の女性は、赤さの濃い品種を選び、「改良種はないよ」と大声で連呼して、目の前のキャッサバがすべて在来種であることをアピールする。改良種の栽培には肥料が使われていると思われており、糖尿病などの病気を抱えた人たちは、健康上の理由で食べないからだ。

キャッサバを村の人たちから買って市場で販売するA村出身の女性も、改良種は売れないから、持ってくる人がいても買わないと話す。ンゴン・クリビ、エコブレなどの在来種は進んで購入するが、改良種は自分の目で見極めて取り除き、欲しい品種だけを買うと言う。また、A村の隣村に住む女性は、市場に自分のキャッサバを持っていったところ、転売者にそれがA村のものか聞かれたと言う。改良種の識別が難しいために、改良種が多いA村のキャッサバすべてを転売者が敬遠しているのだ。この女性は、改良種は大きいので最初は多くの人が興味を示したが、味の悪さから避けられるようになったとも話す。

改良種は売れないと思っている人がA村

にもいるようで、女性が改良種でいっぱいになった袋を道路わきに置いて、市場へ行こうとオートバイを待っていると、「そんなの売れないぞ」と言われたりする。キャッサバの加工品をつくっている人たちの中には、改良種が水分をあまり含まないため加工するとたくさんつくって儲けられるという理由で、それを好んで高値で買おうとする人もいる。だか

ら、改良種が売れないというのは必ずしも正しくないのだが、そういう人を見つけるのも難しいので、売れないと思われてしまうのだ。

「きれいでない」と言われた改良種。大きな背中が小さく見える。昔はあれほど視線を集めたのに、今はもう見向きもされない。その居場所は、誰がどうやって見つければよいのだろう。

なぜ「今、ここ」に「これ」がないのか — 靱殻コンロ開発奮闘記 —

平 野 亮 *

「靱殻コンロ」なるものを開発している。

タンザニアの地方都市には零細な鉄工所があちこちに軒を連ね、それぞれが鍛冶や溶接などの簡単な技術を用いて、農具から調理器具、家具、鉄格子や門扉まで、ありとあらゆる生活実用品を製造している。わたしは、そうした町工場に「弟子入り」し、職人たちとともに働きながら、小規模・零細鉄工業の実態について研究しようとしていた。

ある日、靱殻（もみがら）を燃料にするコンロをつくれないうかという依頼が工場に舞い込んできた。国内では、森林の減少によって燃料不足が深刻化する反面、稲作の拡

大にともなって靱殻が大量に廃棄されるようになっている。その手つかずの資源をどうにか利用できないかというのだ。

鉄工所の親方であるK氏は、環境問題や社会貢献にかねてから関心があり、おがくずを詰めて燃焼させる「おがくずコンロ」を独自に改良し広く普及させた実績をもつ。靱殻は未知の材料だったが、やれるだけやってみようという製品開発を引き受けた。

進まない製作

当初わたしは、どのように新製品が開発されるのかを間近に見られると期待し、その様

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

子を傍観していた。しかし、K氏はほかの仕事に忙しく、開発はなかなか始まらない。催促してようやく試作に取りかかったが、籾殻は燻るばかりで一向に燃えあがらず、開発はたちまち暗礁に乗り上げてしまった。

気になってわたしもインターネットで調べてみると、東南アジアですでに「籾殻コンロ」は開発されていた。その写真や図を工場の職人たちに見せると、彼らは食いつくように見入って、あれやこれやとその仕組みについて考えをぶつけあった。熱い議論はその後何度か繰り返されたものの、だれひとりとして実際につくってみようとはしない。しつこく催促したことでようやく職人のひとりが試作することになったが、彼もほかの仕事で忙しいことを言い訳にコンロの試作には集中できず、時間ばかりが過ぎていった。

今から思えば、歩合制の職人の世界で、売れる保障もない商品に時間と労力をつぎ込む余裕はなかったのであろう。

わからないからやってみる

開発の停滞は、ついにわたしを製作に駆り立てた。すでに町工場の環境にも慣れ、基本的な技能も身につけ、時間と労力はある余っていた。「弟子」から一転、「社内起業家」の誕生である。

インターネット上の情報をもとに、見よう見まねで模造を試みた。もちろん、工学の知識が豊富なわけでも工作の経験があるわけでもない。試作と試験と失敗を繰り返しながら、その構造と原理を理解していく。

主体的には動かない職人たちも、開発自体

には強い関心があるらしく、協力は惜しまなかったし、何より口を挟みたがった。コンロがうまく燃えないと、そのたびに失敗の原因について自信たっぷりと講釈してくれる。残念ながら、先入観にまみれた彼らの経験知は、さらなる失敗を誘発するばかりで、実質的な役には立たなかった。しかし、この失敗の山と先入観への反発が、閉塞状態を打開してくれた。わたしたちは「通気がよいほどよく燃える」と思い込んでいたのだが、何気なく給気を絞ってみたら籾殻が青い炎をあげて勢いよく燃えあがったのである（写真1）。

その後も先入観に何度も裏切られたことは、わたしのうちに、どんな突飛なアイデアでも試すに値するという考えをもたらした。何しろ素人の自分は「何も知らないのだ」「やってみないとわからない」というより、「わからないからやってみる」[橋本 2001]。その精神は今も変わらない。

動かない職人

試行錯誤の末に、製品として及第点のコストと性能をもつ試作品が完成した。籾殻特有の濃い煙も発生せず、強い火力で1リットルの水が10分足らずで沸騰した。

職人たちは、驚き、喜び、「これは絶対に売れる」と断言し、「作り方を教えてくれ!」と頼みさえてきた。ところが、わたしが帰国し1ヵ月後に戻ってみると、その完成品はガラクタのように工場の片隅に放置されていた。

職人は普段、客から注文が来るのをただ待っている。売れるかどうかはわからない新製品を自ら売ってまわるなどということは、



写真1 籾殻コンロ

彼らの仕事ではなかったのだろう。現地で手に入る材料、知識、道具・技術レベルで製品をつくることには成功したが、それだけでは普及には至らない、それはほんの始まりに過ぎなかった。

いっそ援助でやっていけば…

完成した試作品は消費者のニーズに適合するのか。「社内起業家」は市場テストに乗り出す。稲作地域の村では、精米工場のわきに積まれた3階建のビルほどの高さはあろう籾殻の山に圧倒されつつ、工場の前で籾殻コンロを実演した。何かと群がってきた人たちから、青い炎に驚きの歓声が上がり、持ってきた試作品はたちまち売り切れた。結局、3回訪れて計10台のコンロを販売したが、その盛況ぶりは留まるところを知らなかった。

ところが、3ヵ月後に購入者の家々を訪ねてみると、ほとんどの家庭がコンロを使用していなかった。この籾殻コンロは数分ごとに側面を軽くたたいて灰を下に落とす必要があるのだが、それが煩わしいのだと言う。放置すると火が消え、煙が目や鼻に襲いかか

る。淡々と不満を口にするものの、金を返せと言わんばかりの眼差しが、わたしの顔面を殴りつけた。すっかり打ちのめされ、頭の中でふと呟く。「利益なんてどうでもいいから、いっそのこと援助でやっていけば…」

タダで配っていればこんな思いもせずにくんだのではないか。たとえ使われなくたって粗悪品を売りつけたという罪の意識を感じることもないし、貰ったものに対してそんなに文句を垂れることもなかっただろう。

ただしその場合、開発はそこで終わっていたかもしれない。彼らの厳しい意見は、その後、改良や新製品の考案、ターゲット層の見極めを促した。それが糧となり、ぼやけていた消費者のニーズが掘り下げられたのだ。そして何よりも、生産者と消費者をつなぐ「媒介者」の重要性にも気づかされた。

それまで得てきたのは「手放しの賞賛」ばかりだった。しかし、本当に必要なのは「リアルなフィードバック」である。それはタダでは手に入らない。

買ったのに使わない人と貰っても使う人

再び、先入観に反する事実が判明する。試験販売の前に、別の都市のスラムに住む知り合いに籾殻コンロをひとつ贈っていた。彼の家ではそのあと半年以上もこのコンロを愛用しており、薪や木炭をほとんど買わなくなったという。彼の「手放しの賞賛」は少々くすぐったくはあったが、それは実用性を示す「リアルなフィードバック」でもあった。

「買ったら使う、貰ったら使わない」という思い込みは裏切られた。購入者の中には、

買ったにもかかわらず一度も試そうとさえしない者までいた。性急な一般化はできないが、購買力はあるがさほどニーズのない層と購買力は乏しいが切実なニーズを抱える層という市場のねじれがそこにうかがわれる。

なぜ「今、ここ」に「これ」がないのか

一朝一夕にはうまくいかないことはわかった。けれども、普及する条件は十分揃っているように思える。「薪がなければ糲穀を燃やせばいいじゃない」なんて、そこまで奇抜な発想ではない。この「グッドアイデア」はすでに具現化されており、だれでもその情報にアクセス可能だ。つくるのに特殊な材料も高度な技術も要らずコストも現実的である。そして、需要は青天井。

「なぜ『今、ここ』に『これ』がないのか。」それがことあるごとに頭をよぎる。なぜ、現時点でこの地に「これ」がすでに普及していないのか。「これ」が普及しているという、あってもおかしくない「現実」は、なぜ「現実」にならなかったのか。この問いが、研究の裏テーマとなった。¹⁾

おれが本気でやったらうまくいくのか

糲穀コンロに限らず、外部のテクノロジーを普及させようとしてこれまで無数の失敗が繰り返されてきたし、その「犯人捜し」も散々やられてきた。それでもなお、「今、ここ」に「これ」はない。結局その理由はよく

わからない。「わからないからやってみる。」

「おれが本気でやったらうまくいくのか。」それが裏サブテーマである。²⁾「本気でやる」とはつまり、「あらゆるプロセスの責任を引き受ける」ということである。コンロ製作の停滞も購入者からのクレームも、その「犯人」を自分の外に求めている限り前には進めなかった。

この「アクションリサーチ」の中で、自分の「アクション」が正しいのか間違っているのか、いつも疑心暗鬼になる。しかし、「こうすればうまくいく」というルーチン化された「正解」は存在しない（あるならとくに普及している）。それは「うまくいった」とと邂逅的にしか「正解」にならない。現時点においてその「正しさ」を担保しているのは、わたし自身の遂行性においてほかにない。

「これは糲穀コンロではない」

ルネ・マグリットが描いた『イメージの裏切り』をご存じだろうか。パイプの絵の下に「これはパイプではない」と書いてある絵である。先に、糲穀コンロの写真を載せ、その下に「糲穀コンロ」と書いたけれど、もちろん「これは糲穀コンロではない」。

わたしが扱っているのは情報ではなく実体である。つくりあげたいのはモデルではなく実例である。その記録はフィールドノートの中にはなく、その成果は論文の中にはない。

「いいから黙って聞いてくれ」というのが、

1) 表テーマは「タンザニアにおける糲穀コンロの開発と普及に向けた実践的研究」である。

2) 表サブテーマは今のところない。

「書く人」のマインドセットであるならば、
「いいから黙って見ていてくれ」。それが、今
わたしの胸中だ。

引用文献

橋本 治. 2001. 『「わからない」という方法』集
英社.

Identity, Language and Education under Conflict Situations: A Glimpse into the Lives of Kokang People in Myanmar-China Boarder

Gu Pingyuan*

I. Kokang Ethnic Conflict

Kokang people are ancient continental Chinese immigrants to the Northern Shan States of Myanmar from Yunnan province of China. They now live in the Kokang Self-Administered Zone, speak Yunnan official mandarin Chinese, and are now regarded as survivors of the Ming Empire in Mainland China. In the current legal system of Myanmar country, the Kokang is considered as an ethnic minority group under the lineage of the Shan. Unlike Hokkian and Cantonese Chinese immigrants, they are not naturalized citizens of Myanmar. Kokang people have experienced separatism and intended to acquire their autonomy from Myanmar. Nevertheless, there is no detailed anthropological study on the history

or modern-day situation related to Kokang people, particularly with regard to issues that are emerging in the time of ethnic conflict. In this essay, based on a fieldwork conducted in the Northern Shan States of Myanmar from February to March 2017, I will first describe how conflict situation is lived by the normal Kokang people, and then will touch upon the recent development of Kokang ethnic/cultural education in the region.

When I visited S township, Northern Shan State in February 2017, a Kokang girl Y had come back to her hometown to celebrate traditional Kokang Lunar New-Year with her family. She introduced me to her grandmother and explained about the activities that characterized their celebration of the New Year. For the rest of the year, Y told me,

* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

1) Hereby, I refer to younger people as those who were born after the 90s' signification of a peace agreement between the Kokang local government and Myanmar's central government.

she works away from her home, and stays in the border zone. Later, I was astounded to learn that just like Y, a considerable number of younger people¹⁾ from the Kokang ethnic community preferred to work and save money instead of pursuing higher education. Most of these younger people aspired for conducting business in the border zones, such as L-town or M-town located in Myanmar side.

The reason for such career path was gradually made clear to me. Kokang people had a convenient geographical access to the border zone, where there was a potential economic benefit from trans-border trading, including jade mining, logistics, gambling, and hospitality services. As Y had told me, “Many junior middle school graduates who learnt Kokang language and Chinese give up their opportunity for attending higher educational institutes in order to earn more money to enrich their poor extended families as soon as possible.”

As Y's narrative suggests, behind the livelihood pattern of younger people lied the ethnic conflict between the Kokang ethnic group and the Myanmar central government. Since the Independence of Myanmar as a nation state in 1948, Kokang ethnic group has been negotiating politically with the Myanmar central government for the recognition of ethnic autonomous right of the Kokang district. As the negotiation gradually failed to work from 2008, the Kokang local ethnic military force

has had several military conflicts with the army of the Myanmar central government.

The most recent ethnic conflict between the government military force and the local Kokang army started in February and continued until March of 2017, during which I was conducting my fieldwork. Through refugee centers in S Township, tens of thousands of refugees evacuated to different places throughout the country of Myanmar. Some of these centers were located in Shan ethnic (the biggest minority ethnic group inhabiting the Shan States) temples, bus stations, and street markets. I was lucky to have had an opportunity to visit a refugee camp in one Shan temple. I presented myself to the reception counter of the camp with the assistance of food-supplement volunteers, and as a result, I was allowed to have conversation with some of the refugees from the Kokang area. Also, I had a dialogue with one of the parliamentary members of the Shan States and a leader of the Shan community.

According to our conversations, refugee evacuation process have caused some severe problems for the Township. For example, there were serious transportation delays which forced the temple to turn into a refugee reception camp, and at there the refugees still had to wait to enter for two to three days. One representative of the National League of Democracy of Myanmar in the Shan States told me about the poor living condition and



Picture 1. A Shan Temple Used as a Refugee Evacuation Center

In front are the refugees who fled from the Kokang region and are boarding trucks to travel to their hometown in Myanmar.

other security issues related to the ongoing ethnic conflicts in the border-zone. During my three visits to the refugee camp, I was exposed to the refugees' desperate desire to go back to their normal lives, which was shocking. Ethnic conflict, which was a political struggle to gain autonomous rights of the people, was surely causing a lot of difficulties to the lives of ordinary people.

II. Kokang Ethnic Language Education

Political struggle of the Kokang community in recent times seems to be casting shadow on the lives of the ordinary people. On the other hand, development of local and ethnic education seems to me to be implying possibilities of Kokang identity in the future.

Beginning towards the end of 2016, Kokang ethnic language school education in S Township and the surrounding areas was



Picture 2. Refugees Leaving the Shan Temple where They Had Evacuated for Two or Three Days

These trucks are sending refugees back to other, safer centers or to their hometowns.



Picture 3. Celebrating Fiftieth Anniversary of a Kokang Language School in S Township

gradually permitted by the Myanmar central government. This was significant, because the region has been recognized as a gateway to the Myanmar-China border. Since S township was a home to the area's oldest Kokang language school, its recent affirmation by the central government validated its function as an education site for the preservation of Kokang ethnic culture.

Still, there are problems in the schooling system, which resulted in chaotic phenomenon during the school year and following the graduation. For instance, younger Kokang people still hesitate when deciding whether to study their own culture and literature or the official school education in Myanmar, although many (over 135 categories have been enumerated) Kokang language schools have been established. Some reasons for this might be: 1) Inadequate qualification of teachers; 2) An unbalanced ratio of schools and students who intend to pursue studies at the senior high school level; 3) Fundamental structural problems induced by the rough application of Taiwanese and Mainland Chinese versions of textbooks, without considerable reflection and adaptation to the local environment. (e.g., trans-border business, history of frontier formation, etc.)

While schools in Kokang community are not without obstacles, I am interested to know whether they can come up with a new



Picture 4. Kokang Traditional Dance-singing (da-ge) in a Kokang Ethnic Language School
The label 'Kokang' is displayed on the stage.

approach in education that would reflect the unique geographical, historical, socio-cultural context of its own. Such an approach will not be a simple copy of education in schools of other parts of Myanmar or China. This reminded me of a pedagogical consideration for 'borderland humanities' [Giroux 1997]. In this regard, representation of 'Kokang' in schools in S township has an interesting aspect. On the one hand, they put emphasis on 'Kokang-ness,' that they are different from 'others.' For example, knowledge learned in school appeared to exist under a protective label, the 'Kokang,' which problematized their relationship with cultural symbols of the Burmese people as well as with Chinese overseas immigrants (picture 4). But on the other hand, the label has become a political shelter for other newer Chinese immigrants, including the Hokkian and Cantonese in Northern Shan States. Continuous application of this sheltering service have been gradually assimilating these people into the Kokang and the Yunnanese community in the Shan States. I think it worth considering what could be a new possibility for the border education that can be provided to the younger generations of Kokang community in the future.

Acknowledgement

This fieldwork was supported by the 2016 academic year's Explorer Program from the Graduate School of Asian and African Area Studies (エクスプローラー海外渡航調査派遣プログラム) during the

period of December of 2016 to March of 2017. Henceforth, at the conclusion of this fieldwork essay, I would like to present my sincere gratitude the support from the above mentioned program.

Reference

Giroux, H. 1997. *Pedagogy and the Politics of Hope: Theory, Culture, and Schooling (A Critical Reader)*. Boulder, Colorado: Westview Press.

ダーラーヴィーセ ーディーワリーはダーラーヴィーからー

久保田和之 *

「ダーラーヴィーセ (धरती से).」セはヒンディー語で「～から」を意味する。つまりこれは、「ダーラーヴィーから」という意味だ。この言葉は調査地のひとつであるダーラーヴィーで活動している企業家のスレッシュ・アグワネが、インド最大のお祭りのひとつであるディーワリーでのセールに合わせて考案したネーミングである。そしてこれは、ダーラーヴィーにある彼の小売店で販売される製品につけられた「ブランド名」でもある。

ダーラーヴィーは映画『スラムドッグ\$ミリオネア』の舞台であり、既知の人も多いかもしれないが、そこがいったいどういう場所なのかを少し説明しておこう。マハーラーシュトラ州の州都ムンバイの人にはダーラーヴィーで調査を行なっていると言うと、顔をしかめられたり、ダーラーヴィー

なんかに行っているのか、と驚かれたりする。それもそのはず、ダーラーヴィーとはムンバイの中心に位置するアジア最大のスラムのひとつなのである。2.16 km²に60万人が暮らしているといわれている〔城所・鳥海 2013: 1051〕。

一般的なスラムとは違い、ダーラーヴィーの面白い所はモノづくりの集積地でもある点である。ダーラーヴィーには革製品、壺、アパレル製品、刺繍、プラスチック再生業



写真1 ダーラーヴィーの光景

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

を営む小さな工房がひしめいており、さながらスラム工業地帯とでもいうべき様相を呈している。一説にはダーラーヴィーには5,000以上の小規模工業事業所と1,500以上の一部屋のみからなる事業所が存在しており、ダーラーヴィーの年間総生産額は5億USドルともいわれている [Lantz 2009: 197]。

「ダーラーヴィーセ」に話を戻そう。「ダーラーヴィーセ」を企画したスレッシュはダーラーヴィーで生まれ育ち、計装工学の学位取得後、ムンバイ郊外のゴム製造会社等で計装技術者として働いていた。彼曰く、「ダーラーヴィーは大きな資産であって、自分は職人を使ってイノベーションを起こそうと思った。今革製品はムンバイ郊外の工場ですべて機械で作られている。政府もムンバイ郊外に焦点を当てるが、ダーラーヴィーには当てない。このままではダーラーヴィーは将来破壊されてしまう。誰も職人は生きていけない」。彼は革製品をデザイン・販売する事業を始めた理由をこのように語った。

スレッシュが「ダーラーヴィーセ」のセールを打ったのはディーワリーでのことであつた。ディーワリーはインド最大のお祭りのひとつであり、その期間中に買い物をすることは縁起が良いとされている。さらに、ディーワリーには企業が従業員にプレゼントを贈る、あるいは兄弟・姉妹間でプレゼントを贈りあうという習慣もあり、商売人にとってはかきいれ時だ。スレッシュは「この鞆どこで買ったの?」「ダーラーヴィーセ」と言ってもらえれば、マウスマーケティングになると言った。

しかし、この「ダーラーヴィーセ」というネーミングを聞いて、僕は、おかしいような、悲しいような、複雑な気分になる。なぜなら、革製品、それにおそらくダーラーヴィーで作られたもの全般に関して、小売店は誰もそれがダーラーヴィーで作られたとは言わないし、消費者もダーラーヴィーで購入したとはあまり言わないからだ。

ムンバイ郊外のナヴィー・ムンバイにあるショッピングモールには、ダーラーヴィーで製造されているファッションブランドの小売店がある。僕はこの小売店に行き、店員に製品の製造地を聞いてみたことがある。すると、製造地はムンバイだと答えられたので、「ムンバイのどこ? ダーラーヴィー?」と聞くと、店員にはそんなわけないだろうといった表情で「違うよ」と返されてしまった（むろん本当にダーラーヴィーで作っていない可能性もある。けれども、ダーラーヴィーでの聞き取りによれば、そのブラ



写真2 ダーラーヴィーセ・セールのポスター

ンドの製品はすべてダーラーヴィーで作られているとのことだった)。ブランド側からすると、製品がスラムで作られたと知られると、ブランドイメージが下がると考えて然るべきだろう。だからダーラーヴィーで作られたとは言わないのかもしれないと思った。

『『それどこで買ったの?』『ダーラーヴィーセ』』と言ってもらえれば、マウスマーケティングになる」とスレッシュは言う。けれども、それはとても難しいことのように思えた。

スレッシュが普段からデザインした製品の生産を依頼しているのが、SKの工房である。SKにこの話をし、ディーワリーでダーラーヴィーで作られたものをプレゼントにもらった人は、それがダーラーヴィーで作られたと知っているかなと聞いてみた。するとSKはこう答えた。「いや、知らないだろう。たとえば手帳のカバーをここで作って、100Rs（日本円で約157円）で卸しても、それを売る大きなショールームでは1,000Rs（日本円で約1,570円）の値段がつく。そのショールームの店員はこの製品は輸入品だと言うだろう。」それでは、製品を直接ダーラーヴィーで買った人についてはどうか。『『ダーラーヴィーセ』』とは言わないだろう」SKは言う。「ただ、その場にいる誰かが、これはダーラーヴィーで作られたんじゃないかとは言うかもしれないね（笑）。」

小売店も消費者もダーラーヴィーから購入したとは言わない。けれども、ムンバイの人々にはダーラーヴィーで多くの革製品が作

られているのはよく知られている。いうならばダーラーヴィーはムンバイの人々にとって公然なる秘密のモノづくり地帯である。

SKによると、僕が彼と話した時（11月の初め）はダーラーヴィーの工場はディーワリーのプレゼント用の製品の生産でとても忙しい時期にあたっていた。普段のダーラーヴィーの工房は朝10時から夜8、9時くらいまでの操業であるが、ディーワリーを控えた時期は操業時間は固定されず、夜通しで作業を行なうか、朝の4時くらいまで操業している所が多いらしい。確かにそう言われてみると、夜遅くでも普段より工房に明かりが灯っている場所が多いように思われた。

SKに連れられて、エンボス¹⁾加工を行っている工房に行くと、3人の男性と1人の女性がひっきりなしに、エンボスの機械を操っていた。彼らによるとこれらはすべてディーワリー用のプレゼントだそうで、プレゼントを贈る企業の名前や、プレゼントす



写真3 エンボス加工の様子

1) 紙・布・皮革などに浮き出しの模様をつけること。



写真4 電飾を取り付けるSK

る相手の名前がエンボスされていた。そこにはダーラーヴィーという文字は決して入らないのであり、プレゼントをもらった人はそこに刻印された自分の名前を見て喜びに包まれることがあっても、それが刻印された場所に思いを馳せることはないだろう。

5日間にわたるディーワーリーの初日、SKがどこからか電燈を買ってきて、工房の入口に取り付けた。ディーワーリーの時には町中に電飾がほどこされ、子どもたちが花火やクラッカーに夢中になる。ディーワーリーは日本の正月に少し似ており、この時期には帰郷する者が多く、ディーワーリーの後は新年という扱いになる。

しかし、これも皆帰郷するわけではない。とあるコルカタから来た革製品の職人はディーワーリーの時にも帰郷せず、工房で働くと言っていた。商魂たくましいスレッシュも「企業家 (entrepreneur) に休日はない」と、ディーワーリーも仕事のようだ。



写真5 ランゴリーを描く女性



写真6 ディーワーリーにふるまわれるお菓子

ディーワーリーの3日目は吉祥・幸運と美の女神であるラクシュミーにプージャ（供養）を捧げる日である。この日は別の工房主のナーナサヘーブ・ラウトから家に招待された。家の前にはディーワーリー用のランゴリー（砂絵。大理石の細粒に各種の色粉を混ぜ、それで地面などに直接絵を描く [プラブ 1986: 14]）がほどこされており、家ではディーワーリー用のお菓子をいただいた。

ナーナサヘーブは今日は休みで工房には行かないのかと思っていると、工房にラクシュミープージャを捧げるために行くというのでついて行った。作業台をわきに移動し、箒で



写真7 工房でのプージャの様子

ごみを集め、ゴザを雑巾で洗い、入口に飾りをほどこし、祭壇を設置し、灯りを灯す。18時くらいに着いたが、随分念入りに準備をしており、プージャが始まった頃には20時を過ぎていた。その間僕が手持無沙汰にしていたので、これでも見ておいてと、ナーナサヘーブの携帯電話を渡され、そこに保存されている写真を見ていた。写真にはプネー、デリー、ブッダガヤ、リシュケシと各地を旅行しているナーナサヘーブとその家族の姿が写されていた。スラムの居住者には旅行は高額の出費であり、旅行に行くのは不可能であると思っていたので、これまた驚きであった。線香を炊き、インドの宗教文献で主に用いられるサンスクリットのマントラ²⁾を唱えながら、灯明を捧げ、おさがりのラッドウー（団子）とココナッツミルクをいただいてプージャは終わる。プージャを終えたナーナサ

ヘーブが優しくそうな目で「人生は一度きり。人生楽しまないと」と言ったが、その言葉は異国の地でせわしなく調査を行なっている自分へのねぎらいであったのかもしれない。

ディーワーリーが終わり、店長にダーラーヴィーセの売れ行きを聞くとまずまずだったそうである。スレッシュに、製品を買った人は「ダーラーヴィーセ」と他の人に言ってくれたかなと聞くと、「もちろん。ダーラーヴィーセ」と自信満々だった。

ダーラーヴィー、それはムンバイのモノづくりを陰で支えており、小売店では絶対に口に出されず、消費者もあまり口に出さない公然の秘密の場所。スレッシュの試みはそれに対する挑戦であるが、「ダーラーヴィーセ」という言葉はディーワーリーの喧騒の中でつぶやかれたのだろうか？

引用文献

- 城所哲夫・鳥海陽史. 2013. 「ムンバイ・ダラービーに見るインフォーマル市街地の社会生態空間の生成実態—住民間の交流空間の生成に着目して」『日本建築学会系論文集』78(687): 1049-1056.
- プラブ, ジョーシー. 1986. 「孤独な葉しべ」石田英明訳『インド文学』20: 6-14.
- Lantz, M. 2009. Housing Statistics. In Jonathan H. Engqvist and Maria Lantz eds., *Dharavi: Documenting Informalities*. New Delhi: Academic Foundation, pp. 196-197.
- 高島 淳. 2012. 「マントラ」辛島昇・前田専学・江島恵教・応地利明・小西正捷・坂田貞二・重松伸司・清水学・成沢光・山崎元一編『新版南アジアを知る事典』平凡社, 773-774.

2) 古代インドにおいて解脱や神秘的効果をもたらす手段とされた特別の言葉 [高島 2012: 773-774].

フィールド・ホーム・バーチャル

—モンゴルのツァガン・サル, 1998年～2019年—

風 戸 真 理*

1998年2月27日, 修士課程の長期調査でモンゴルの牧畜地域に住み始めて9ヵ月目に私は初めての「ツァガン・サル」(*Tsagaan Sar*)を迎えた。モンゴル語のツァガン・サルは「白い月」と訳せ、モンゴル暦¹⁾の「春の 最初の月の 新の一日目」つまり日本でいう「元日」とそれに続く時期を指す。

モンゴルの年越し儀礼は「ピトゥーン」とよばれる大晦日と「シン・ジル」とよばれる新年を区切るものである。大晦日の日没後に遊牧民は、一緒にキャンプしている他の世帯を一軒ずつ訪ねて「バンシタイ・ツァイ」(肉餃子の乳茶煮)をふるまわれ、また自宅に隣人を迎えて同じ料理でもてなす。元日には、ふだんどおりに起床して雌ウシの搾乳やヒツジ・ヤギの放牧をするかたわら、若い夫婦は両親をはじめとする年長親族を徒歩・騎乗・牛車²⁾で訪問し、年始の挨拶をして贈り物を渡す。テーブルには天日干し乳製品(アーロール)や小麦粉の巨大な揚げ菓子(ヘヴィーン・ボーウ)が高く積まれて盛りつけられ、ヒツジの全身を大きく切り分けて蒸した「オーツ」が飾られている。ホスト

がオーツの肉をナイフで削りとってくれるのをゲストは両手で受けとって味わう。そして前夜の肉餃子を今度は水で蒸し上げた「ボーズ」と、牛乳などを材料とした自家蒸留酒でもてなされる。

1997年4月から1999年3月に、私は京都大学大学院人間・環境学研究科の修士課程に在籍しながら平和中島財団の留学奨学金を受けてモンゴル国立大学に2年間留学していた。1年目には、首都ウランバートルから約650 km離れたアルハンガイ県チョロト郡バヤン・ハイルハン行政区の牧畜世帯に住みこんで寝食を共にしながら家畜管理の技法と遊牧民の社会関係のあり方を調査した。

ハイルハン行政区の遊牧民は家畜の食草や子どもの通学などを理由に年に4～10回移動する。行政区内には1998年3～4月現在約160世帯があり、一緒にキャンプする世帯の集まりである「居住集団」は1～7世帯(平均4.3世帯)で構成されていた。居住集団の構成は日々変化するが、1997年9～10月に見られた居住集団は約30であった。私は2年間に83の居住集団の構成メンバーの

* 北星学園大学

1) モンゴル暦はモンゴル独自の陰暦で、年の始まりはグレゴリオ暦の1～2月にあたり、日本の旧正月や中国の春節と同じ日の年も別の日の年もある。

2) ハイルハン行政区の「ウシ」にはヤクが多く含まれ、牛車などの荷役にはヤクとウシの雑種第1代やヤクが主に使われた。

親族関係を調査した。

実際にやったことは、ひとつずつゲルに入って夫婦2人の顔を見て自己紹介をし、日々の暮らしの様子とともに隣のゲルの構成員たちとの関係を尋ね、逆に問われて日本の生活を語り、最後に家族の写真をあらゆる組み合わせで撮影し、私も一緒に写真に写った。その後首都ウランバートルに出かけた折に写真を現像し、写真を持って同じゲルを再び訪ねて補足の聞き取りをする、その繰り返しであった。当時の私はモンゴル語があまりできず、草原には自身のことを外向けに説明するのに慣れた人が少なかったので、五感を駆使して挑む直接観察が調査の根幹となった。

ゲルに入ることは誰にでも許されていた。ゲルに入ってベッドやイスに座ると、室内の装飾や整頓の具合を見る。お茶と自家製の乳製品を手渡されて味わう。そして、私に話してくれること、家族どうしの会話、戸外のウシやヤギたちに投げかけられる「ハイッ!」という叫びを聞く。話しながらも作業を続ける人の手の動きをみつめながら、このように、直径6mほどのゲル内空間で、半日ほどかけて進む会話とともに流れる時間を私は彼らと共有し、写真撮影時にはくっついて座ったり肩を組んだりすることで筋肉に触れ、匂いを感じた。これらを繰り返すゲル訪問調査はきわめて身体的な経験であった。

当時のハイルハン行政区には電気も電話もなかった。円形のゲル内ではすべてが丸見えで調査はしやすかったが、自分が身を隠す場

所もなかった。湯浴みは、かまどで湯を沸かした後に家族全員にゲルから出てもらい隣の家で待っていてもらうのだが、湯が沸いた時に客が来たりしてなかなか成功しなかった。日本への連絡には、週1回行政区の中心地を通る「ショーダン」(郵便、写真1)とよばれる小型トラックの運転手に手紙を手渡した。このように1990年代のモンゴル遊牧民調査は文字どおり「地を這うような」調査であった。

2010年代になって一回り以上若い後輩がウランバートルからさらに離れた牧畜地域で長期調査をした。彼女は行政区よりも大きな「郡の中心地」を調査拠点としていたが、現地で携帯電話とパソコンを使っていて、私も電話やメールで彼女と連絡を取り合った。モンゴルの草原ではこの約20年の間にソーラーパネルによる自家発電が普及し、携帯電話の無線基地局が各郡の中心地にでき、インターネットの電波も送受信されるようになった³⁾。2019年1月現在、ウランバートルな



写真1 草原の通信網「ショーダン」
ウマや牛車で駆けつけ人と荷を限界まで載せる
(モンゴル国アルハンガイ県、1998年)

3) モンゴル国の通信事情および Facebook 利用の詳細については別稿を参照されたい [風戸 印刷中]。

どの都市および全国の県や郡の中心地には携帯電話およびインターネットの無線基地局があり、人びとはスマートフォンで、モンゴルの国民的ソーシャルメディアである Facebook を利用している。電波の届かない草原に暮らす遊牧民もアカウントを作ったり、都市に進学した子どもを通して日本にいる私と連絡を取り合う。

2018 年 2 月 16 日、私は自宅のある札幌でツァーガン・サルを迎えた。そして、その 1 週間後の 2 月 24 日に「北海道モンゴル交流協会」の伝統文化祭典に招かれた。この協会は北海道に住むモンゴル人の親睦会が母体となって、道内のビジネス交流等の窓口としても機能しているものである。会場となった札幌市苗穂本町地区センターの体育館に入ると約 10 人用のテーブル 5 卓に、ツァー



写真 2 札幌でのツァーガン・サルのテーブル
奥に天日干し乳製品と揚げ菓子のタワー、手前に
内裏雛が描かれたケーキ（日本国札幌市、2018 年）

ン・サルに欠かせないヒツジの肉、天日干し乳製品と揚げ菓子（写真 2）、ボーズ、ウォッカに加えてケーキ、ハム、サラダ、チョコレート、ジュースなどが所狭しと並べられていた。

ステージでは、司会者が独特な発声と節で祝詞を謡い、子どもたちがヒツジのくるぶし骨や木製のモンゴル知恵の輪でゲームをし、参加者が装うモンゴル服「デール」を評価する男性ファッションショーと女性ファッションショーなどがおこなわれた。フロアからは有志らがアカペラでモンゴル演歌を披露をした。最後に、ダンサーの指導で全員が輪になって手を繋ぎ、西洋風のステップを練習してから輪舞した。途中で「ビエルゲー！」（肩の動きが特徴的なモンゴル国西部の踊り）との指示が出て、全員がモンゴル伝統芸能にチャレンジしたが誰も上手にできなくて笑いながら閉会した。

この頃、Facebook のモンゴル語グループ「世界旅行者」(*Delhiigeer Ayalagchid, World Wanderers*)⁴⁾ では連日、世界各国に暮らすモンゴル人がそれぞれのツァーガン・サルの様子を写した写真を投稿していた。立派なモンゴル服と帽子で正装してケルン大聖堂の前に立つ家族や、アフガニスタンのモンゴル人会の祝宴テーブルに飾られたモンゴル国旗を描いた大きな四角いケーキなどに多くの「いいね！」とコメントがついた。

今年もまたツァーガン・サルが近づく。
2019 年のツァーガン・サルは 2 月 5 日であ

4) 「世界旅行者」はモンゴル国の総人口 318 万人の 18%にあたる 55 万人（2018 年 1 月現在）が参加している人気のモンゴル語グループである。

る。Facebook では3週間ほど前から、肉・天日干し乳製品や馬乳酒の個人間売買の広告、過去のツァガン・サルでテーブルいっぱいに並べられたご馳走の写真、ボーズの皮を超速で伸ばす技術動画、ボーズ・メーカーのマーケティング調査など、ツァガン・サルの準備の話題で盛りあがっている。私も職場から帰って自宅のパソコンを開くとツァガン・サルの話題に引きこまれる。

Facebook にはふだんから、とくに地方の人たちは家族や親族の写真をよく投稿する。そして、そのような投稿に率先して「いいね!」をつけるのも近親者である。かつてゲルを一軒ずつ訪問して調査した親族関係が、今やパソコンの前に座りながらにして手にとるようにわかる。私が彼らの投稿を見ると、ひとりひとりの声やしぐさが脳裏に再生される。ソーシャルメディア上での彼らのコミュニケーションを見るとき、その2人の間に過去に生じた具体的なトランザクションが思い出されて今に繋がる。

2018年のツァガン・サルには、モンゴルの友人たちが、新年を祝う詩・挨拶・グリーティングカード（画像やアニメーション）などをFacebookのメッセージ機能を使って私に送ってくれた。年中行事に限らず日常的にモンゴルからメッセージが届き、電話がかかり、さらにまったく知らないモンゴル人から日々「友達」申請が来る。この状

況で、私の身体は札幌で日常生活を送りながらも、1日のうちの何時間かをモンゴルで過ごしているような感覚を覚える。

地を這うような調査のなかで初めて迎えた1998年のツァガン・サルの経験は私の身体に深く刻まれた。草原に通信テクノロジーが入ると同時に、交通手段もウマ・牛車・ショーダンからバイク・自動車・定期バス（ウランバートルと地方を毎日数回往復）に変わり、「フィールド」と「ホーム」との行き来は約20年間で格段に楽になった。日本にいながらにしてモンゴル人のパーティーに招かれ、自宅にいながらにしてモンゴル人の新たな「友達」ができる。Facebookのテレビ電話で遊牧民の友人と雑談すると、私が彼らの暮らしを観察してきたように彼らも私の生活を映像と音声で把握する。バーチャルなモンゴル世界が、私の「今ここ」のリアル世界に浸透していると感じるが、私の遠隔的な「理解」はこれまでの22年間にモンゴルに通い、日本ではその経験を考えぬき、語り、書いてきた、その直接的な経験を通して少し身につけたいわば「モンゴル・センス」を基盤に成り立っているといえるだろう。

引用文献

風戸真理. 印刷中. 「モンゴル国—人口318万人のFacebook 大国」田中樹・宮寄英寿・石本雄大編『フィールドで出会う風と人と土と3』総合地球環境学研究所.